

田野畑のいまとこれから

田村友一

(明星大学総合健康センター学生相談室)

高下 梓

(明星大学人文学部)

平田 茜

(明星大学大学院人文学研究科)

I はじめに

岩手県沿岸部は日本でも数少ないリアス式海岸が、美しく雄大な景観を誇る地域である。田野畑村も例にもれず、西部・中央部のなだらかな山々が作るのどかな風景から、太平洋へ近くにつれて地形は大きく変化し、東西に延びる谷々が深く大地を刻んでいる。名勝北山崎や鶴の巣断崖は約200mの断崖絶壁で「海のアルプス」とも呼ばれる。この美しい浜と雄大な陸地が村民の生活を見守り、多くの村民がその自然の恩恵を受けながらこの地に生活を根ざしてきた。

しかし2011年3月11日、その自然の強大すぎる力は24人の方の未来を奪った。浜を中心とした海拔の低い地域は壊滅し、村や地域は分断された。地形的な特徴によって、同じ地域のある地点より低い地域の住宅は跡形もなく流されている一方で、そのすぐ上の住宅は無傷で残っているような光景がそこかしこに見られた。

少しずつだが着実に進む復興を横目に、それぞれがさまざまな想いと共にこの1年半を過ごしてきている。本報告では田野畑村保健センターの保健師へのインタビューをもとに、外部

支援者がみた田野畑村の今を報告する^{注1)}。

II 田野畑村のいま

1. 3.11 とその後

田野畑村の人口は約4,300人で、65歳以上の高齢者が約30%を占め、出生数は年間30人弱である。少子高齢化が進んでいるが、村の中にいけば「あの人はどこの誰」ということが大体分かり、親戚縁者も村内で重なることが多い。村には古くから「結(ゆい)の心」という地域協働の精神が引き継がれており、集落内の結束が固い反面他の集落との交流が希薄な面もあった。主要産業は水産業と酪農で、観光業では漁村の原風景をとどめる「机浜番屋群」や、小型の磯舟(サツパ船)でのクルージングなどがある。

2011年3月11日、村では震度4の揺れを記録した。村内全ての水門は閉鎖されたが、最大湖上高25.5mの大津波はコンクリート製の防波堤を破壊し、水門を乗り越え、10m超の大津波が繰り返して押し寄せた。死者は24人、行方不明者15人、負傷者6人、被災住家数は281棟、被災世帯数251世帯、被災者数734人であった。住家の被害が最も多かったのは、沿岸域の高越

注1)本報告は岩手県田野畑村保健センター久保朋子保健師への依頼であったが、2011/3/11以来、業務の負荷があまりに大きく、さらに負荷を拡大せざるを得ない状況にあるため、久保保健師と検討の結果、インタビューの形式で状況を分析し、著者らが執筆した。

地区であった（全壊121棟、大規模半壊9棟、半壊8棟、一部損壊4棟）。この地区は湾に面する形で集落が形成されており、集落の7割の建物が流出した。三陸鉄道の田野畑駅は橋脚を含めた鉄道施設が全壊流出し、周辺家屋39棟も全流出した。駅前に残ったのは宮沢賢治の歌碑のみであった。漁港施設・魚市場・水産加工施設・倉庫なども壊滅的な被害を受け、沿岸の基幹道路も寸断された。羅賀地区では、6割の建物が流出し（全壊99棟、大規模半壊9棟、半壊14棟、一部損壊5棟）、漁港施設以外に宿泊観光施設などが被災した。明戸地区では防潮堤が決壊し、10戸の住戸と防潮林や健康増進施設、サケふ化場等が全流出した。机地区では「机浜番屋群」などが全棟流出し、観光拠点も全て消え去った。その他にも全村で多くの福祉、教育、林業、ガス、家畜、水道などの関連施設が被災した。

震災当日、約600人が避難所へ避難した。避難者たちの間には集落を越えた協力関係が作り出され、早稲田大学の学生がダンボールでスペースを区切る衝立を作ったが、避難者たちは「要らない」と答え、着替えスペース以外に衝立のない避難所であった。

震災からの1年間を表1にまとめて示す。

2. 復興状況

田野畑村の復興計画は、①防災の地域づくり、②生活再建、③地域振興に大別される。防災の地域づくりでは、緊急性の高いものとして、「地域コミュニティの再生」や「防災活動体制の整備、防災教育推進」などがある。村は「二度と津波で人命を失わない」を合言葉に、被災地域の高台移転や防災機能の強化を目指している。高台への集団移転は、土地の造成が始まり安心できるまちづくりに向けて動き出したところである。生活再建については何よりもまず生活資金の確保が急務だが、就労に関しては主要産業の復興状況に依存している。主要産業の水産業、観光業の再建は地域振興の中心でもあり、観光業は復興工事の進捗に伴って少しずつ村外からの人出も戻り、水産業でも漁の再開や加工施設

等の復旧が進んできているが、漁業用地の嵩上げや避難経路の整備などの本格的な再建までにはまだ時間がかかる。鉄道も本格的な工事が始まり、平成26年4月の全線運行再開を目指している。

仮設住宅には現在も135世帯が生活しているが、今後随時退去し生活を再建していくことになる。仮設からの再建は①自立再建、②集団移転、③災害公営住宅の3通りがあり、現時点で転居最終希望調査が終了している。補助金を受けて自立再建し、村内外へ転居される方、集団移転や災害公営住宅への平成26年度入居を目指す方などが中心だが、中には自立再建を選択せざるを得ないが再建の目途が立っていないという方もいる。また仮設への物資の支援はほぼなくなり、必要な物は自費で購入するようになっている。

着実に自立へと動きが出しているが、関係者は皆一様にメンタルヘルスの問題を懸念しており、中でも「何も言わない人」が特に気がかりとのことであった。

3. メンタルヘルス

田野畑村ではこの1年半の間に5名もの自殺者が出ている。そのうち1人は地域の中心的存在で、被災後も周囲を励ましてきた方であったが、昨年11月の復興祭当日に村の象徴である橋から投身して亡くなった。継続的な心理的ケアが必要と思われる村民への支援の手が届いておらず、実際に使える資源も限りなく少ない。医療機関や入院施設も近隣の市町村まで行かなければならない。保健センターが社会福祉協議会事業と連携し被災者情報を共有するシステムを構築して、住民の変化を把握するよう努めているが、マンパワーが不足しているため対応が行き届かない状態である。カウンセラーや精神科医の要請訪問はあるが、その頻度は多くて月に1日程度で、常駐するメンタルヘルスの専門家もいないため、精神的な問題が疑われるケースも基本的に保健師が対応せざるを得ない。現状では心身のケアのほぼ全てを保健師4名（うち人的支援により村外から1名）で対応している。

表1 震災から約1年間の歩み

3月	11日	東日本大震災
	12日	村内ホールに601名が避難。漁船は沖に避難中
	13日	村役場の電気復旧
	18日	村立小学校・中学校卒業式
	20日～	隣町のホテル2カ所が避難住民に入浴の提供
	25日	浸水場所への消石灰散布（村民ボランティア）
	29日	島越漁港のがれき撤去作業開始
4月	2日	がれき撤去の作業を行なう被災者支援事業を開始
	8日	仮設住宅建設スタート（村内3カ所、計186棟）
	28日	復興計画策定委員会の立ち上げ
5月	6日	仮設住宅50戸完成（16日入居開始）
	26日	仮設住宅94戸完成（28日入居開始）
6月	1日	田野畑駅舎で2店舗が営業再開
	16, 17日	天然ワカメの共同採取（サッパ船34隻）
	28日	仮設住宅42戸完成（7月2日入居開始）
7月	4日	仮設住宅への入居が完了し、避難所を閉鎖
	8日	津波で流された卒業記念ボールが北海道音更町より届く
	10日	東日本大震災犠牲者お別れ会
	29日	サッパ船アドベンチャーズが再開
8月		大津波語り部&ガイドを開始
	1～31日	田野畑村保健センター ボランティア活動
	20日	田野畑村ムーミン谷のお食事会開催
11月	1日	島越漁港に秋サケの水揚げ
	3日	三陸鉄道北リアス線の復旧工事起工式
	19日	田野畑村復興祈念祭前夜祭、村の未来を語る会
	20日	田野畑村復興祈念祭、復興道路着工式
12月	28日	島越に仮設市場が完成
1月	28日	羅賀・島越両地区の住宅の集団移転候補地を決定
2月		津波防災対策講演会、「復興の狼煙ポスタープロジェクト」の撮影会（120人参加）
	15日	田野畑村災害復興計画・基本計画の説明会開催
	23日	島越南港の漁業漁具倉庫完成
3月	11日	田野畑村東日本大震災一周年追悼式
	26日	養殖ワカメの採取が始まる、「島の沢水門」完成式
	28日	ワカメの塩蔵加工が再開
4月	1日	三陸鉄道、田野畑－陸中野田間が運行再開
	16日	平伊賀の水産物加工施設が完成

保健センターでは日常的な業務として住民の健康管理などの保健活動および高齢者福祉・障がい者福祉サービスの窓口業務を行っている。これらに加え被災者の健康管理・生活相談等を行い、さらに外部からの支援提供依頼への対応にも追われている。

今後こうした状態が継続的に続けば、断続的な自殺者の出現、精神病圏の問題の発症・悪化などはもちろん、保健師をはじめとした対人援

助職のバーンアウトも懸念される。

4. 支援の試み

こうした田野畑村の支援体制の現状に対して、明星大学の黒岩らが遠隔地からの可能な支援を提供する試みを行っている。別稿の中村らの報告に詳しいが、電話相談窓口の開設や、現地の対人援助職への支援、自殺予防対策のための講演活動などがある。その他昨年8月に被災地対

象にバラを一輪届ける「バラ作戦」や、現実的な苦しさを一日でも解放できるようなファンタジックな空間を演出した「ムーミン谷のランチオンパーティ」などの直接支援も行っている。

村独自の支援としては、保健師による日々の対応の他に、仮設住宅集会所に相談支援員が常駐し、被災者の健康や生活に関する相談を関係機関へ繋げる支援や、独居高齢者の見守り訪問を行うシルバーサポーター等がある。相談支援員やシルバーサポーターには、心理の専門職による講習会を開きながらこの凝集性の高い地域に効果的な外部支援を浸透させる工夫を行っている。

その他、隣接の市町村からの人的支援、村外・県外の学校や姉妹都市との交流、官民の各団体や有志などからのさまざまな支援提供を受けている。

Ⅲ 被災地のジレンマ

1. 被災者が失ったもの

「命が助かったことが何より」と被災者から語られるように、東日本大震災では多くの命が喪われた。同時に愛着のあった家財や親しんだ生活環境など、多くの「もの」も奪い去られた。当然生活上の不便さや金銭的な損害は大きかったが、「もの」への個人の意味づけはさまざまであり、物理的な損失以上の大きな喪失感を伴う体験であったと思われる。「震災で失った大切なもの」は何だったのか。それにはどのような価値があったのか。学童期～高齢期まで、それぞれのライフステージにある被災者の方々に話を伺うことができた。

「被災により失くしてしまった大切にしていたもの」はさまざまであった。集めたおもちゃ。子どもの成長や自分と家族の人生の歩みを写した写真などの記録物。住んでいた土地や日々続く生活環境。これらが持つ価値は非常にプライベートなものであるが、しかしそれゆえに個人の精神的な支えであり基盤であった。より巨視的に見れば個人のアイデンティティに関わるものであったといえるかもしれない。すなわちあの震災がもたらしたものは、地域や人々の断絶

だけでなく個人の歴史ともいべき連続性の断絶であった。1年半経った今、被災者は「復興に向かう今」と「2011年3月11日」の2つの時間の中にいた。連続性の断絶は時間の断絶でもあった。「復興」は何を持って了とするのだろうか。

被災者の方は「見ず知らずの方にまで支援していただいた。いつまでも失くしたことに囚われてはいけない」、「でも、ふっきれない思いもある」、「ふっきれないのは自分の弱きなんじゃないか」と複雑な胸中を語られていた。復興が進み、生きてゆくための物理的な環境が整えば、外からは「元通りの生活」に見えるかもしれない。しかし、それらが精神的基盤となるまでには途方もない時間とエネルギーを積み重ねなければならない。被災者は今、“再建しなければならないが、失ったものは戻ってこない”という葛藤の中に生きている。

2. 可視的な被害がないということ

一方、被災地域にいながら家や家族が残った方々からもお話を伺うことができた。そこには残った者の罪悪感に根ざした生きにくさが語られていた。震災後可視的な被害の有無で「被災者」の線引きがなされ、当事者の意識もまた同様であったが、被災直後は仮設住宅に物資が溢れ、援助に回った方々の家には翌日の食料もないというような状況が生まれていた。仮設住宅近くに住居を構える方は、周囲の目を気にして自分の畑の農作物の収穫さえできなかったと聞く。ある人は1年半以上たった現在も毎週参加していた飲み会を控えている。食べるものに困窮する中で仮設住宅用に配られたパンに手を付けられなかった時のもどかしさを今でも鮮明に記憶している方もいた。多くの方が残った罪悪感を抱えながら我慢する生活を続けており、被災者かどうかという区別に縛られ苦しんでいた。それらが今ようやく語られ始めている。口々に「今だから話せる」、「外の人だから話せる」と言い、そこには可視的な被害のない方々の抱える大きな葛藤があった。

現状ではこうした思いには全く手が届いてい

ない。それどころかこうした方々が支援側に回っている。しかし仮設住宅に住む方の中には、家が残った方からの支援を拒み、同様の体験をした人々の中で関係を収束させたいと思っている方もいる。震災は地域を分断し、人々の関係性にも大きな亀裂をもたらした。実被害によるものだけでなく苦しみに対して、そのケアの必要性を痛感すると同時に、被災地の抱える大きなジレンマを見た。

IV 田野畑村のこれから

田野畑村の長い歴史の中で培われてきた住民同士のつながりは、村を支え、特有の文化を醸成してきた。今年の夏、村民に「田野畑村の良いところ」を書いてもらう機会があったが、その中に「みんな親戚、みんな友達」と書かれたものがあった。たとえ災害がなくとも古くからこの村は、自助・共助の強い絆で形作られている。そこには災害後にわかに溢れかえった「絆」とは明確に違う何かがあるように感じられた。

この凝集性の高さは力であり同時に弊害でもあった。このパラドックスはこれまで絶妙なバランスで維持されてきたが、未曾有の大災害を前に大きく軋み崩れかけている。地域の分断によって関係性は変化し、より小さくしかし強固な同属のつながりが生み出された。強固すぎるつながりは、その他のものが入り込む間隙を許さない。支援者はこうした背景を前提に、いかにして支援の手を差し込むか、地域性に即した効果的な支援とは何かを考える必要がある。限りある援助資源を急激に増やすことはできない。地域性に急激な変化を期待することもできない。ならば今ある資源を最大限有効に活用し、支えである地域の自助・共助の土台をより効果的な形で機能するような枠組みに変換していく必要があるのではないか。自助・共助の強い土台は田野畑村の持つ大きな力であり希望でもあ

る。被災者支援というミクロな視点を、被災地域コミュニティ全体の支援にまで広げ、限られた資源で可能な、田野畑村独自の支援体制の構築が急がれる。

V おわりに

東日本大震災から1年半が経過し、村は確かに少しずつ復興へと進んできているように見える。しかし未だ多くの被災者が大きな葛藤を抱え、家が残った者の罪悪感もここへきてようやく口にできるようになったところである。震災により傷ついた心は、日々整備されていく被災地と同じだけのスピードで回復してはいない。

失ったものは元通りには戻らない。また新しいものを作り直さなければならない。それは住居などの物的なものだけでなく、人間関係や地域社会などあらゆるものに当てはまる。元来資源の少ない田野畑村ではその労力は途方もなく大きいかもしれない。しかし資源がないことは決してネガティブなことばかりではない。今あるものを維持しながら効果的に開かれた田野畑村にしていくチャンスでもある。資源の少ない村独自の外へのつながり方の可能性を求めて、支援者は先導役としてつながり方、開き方のお手伝いをする必要があるのではないか。田野畑村の強いつながりの力が、新しい田野畑村を形作り、本当の意味での復興に向けて歩みだすその一端に、今後も微力ながら参加させていただければと思う。

参考文献

- 1) 田野畑村：東日本大震災田野畑村災害復興計画（復興基本計画）、2011。
- 2) 田野畑村：東日本大震災田野畑村復興整備計画（第1回変更）、2012。
- 3) 田野畑村：東日本大震災田野畑村記録書 記憶を未来へ、2012。
- 4) 田野畑村：広報たのはた、2012。